

染太夫一代記

平成30年5月20日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

「染太夫一代記」の部分コピーが、かなり以前から書斎の本棚にある。江戸時代に別子銅山を旅した人なので、誰かからもらっていた。染太夫の新居浜への旅は、1回限りだったのかと考え始めた。「染太夫一代記」は、てっきり別子観銅山記念図書館の館蔵本だと思って、目録を調べるがない。それでは近隣の図書館にないかと調べると、徳島県立図書館にあった。公共図書館の相互貸借サービス制度を使って、司書に借りてもらう。384ページの立派な本であった。さっそく、江戸時代の旅を現代文にまとめながら読んでいくこととする。

2. 本の構成

写真		
目次	P	1 ~ P 10
解説	P	11 ~ P 18
染太夫略年表	P	19 ~ P 21
凡例	P	23
序	P	26
第一の巻 (寛政9~文政10)	P	27 ~ P 35
第二の巻 (文政11~文政12)	P	36 ~ P 43
第三の巻 (文政12~天保2)	P	44 ~ P 50
第四の巻 (天保2)	P	51 ~ P 59
第五の巻 (天保2)	P	60 ~ P 70
第六の巻 (天保2~天保3)	P	71 ~ P 79
第七の巻 (天保3)	P	80 ~ P 88
第八の巻 (天保3~天保5)	P	89 ~ P 96
第九の巻 (天保5~天保7)	P	97 ~ P 105
第十の巻 (天保7~天保8)	P	106 ~ P 114
第十一の巻 (天保8~天保9)	P	115 ~ P 122
第十二の巻 (天保10)	P	123 ~ P 132
第十三の巻 (天保11~天保12)	P	133 ~ P 140
第十四の巻 (天保13)	P	141 ~ P 150

第十五の巻	(天保 13)	P 1 5 1 ~ P 1 6 2
第十六の巻	(天保 13)	P 1 6 3 ~ P 1 7 7
第十七の巻	(天保 13 ~ 天保 14)	P 1 7 8 ~ P 1 9 2
第十八の巻	(天保 14 ~ 天保 15)	P 1 9 3 ~ P 2 1 1
第十九の巻	(弘化元)	P 2 1 2 ~ P 2 2 8
第二十の巻	(弘化元 ~ 弘化 3)	P 2 2 9 ~ P 2 4 3
第二十一の巻	(弘化 3 ~ 弘化 4)	P 2 4 4 ~ P 2 5 8
第二十二の巻	(弘化 4)	P 2 5 9 ~ P 2 7 2
第二十三の巻	(弘化 4 ~ 嘉永元)	P 2 7 3 ~ P 2 8 6
第二十四の巻	(嘉永元 ~ 嘉永 2)	P 2 8 7 ~ P 2 9 9
第二十五の巻	(嘉永 2)	P 3 0 0 ~ P 3 1 4
第二十六の巻	(嘉永 2)	P 3 1 5 ~ P 3 2 5

予州郡中鐘掛天満宮出火の事

梶太夫伊予銅山行き極まる事

予州西条新居浜角屋へ着く事

親類増田半蔵に世話になる事

角屋の土蔵に梶太夫の住所拵^{こしら}ふ事

第二十七の巻	(嘉永 2 ~ 嘉永 3)	P 3 2 6 ~ P 3 3 9
--------	---------------	-------------------

予州新居浜加登屋九右衛門土蔵うちにて

梶太夫連中のけいこ始める事

梶太夫の弟子中打ち寄って今宵節分によって

大坂流虎子殿の見舞いしやれの事

梶太夫新居浜土蔵にて越年の事

西条新居浜慈明寺において梶太夫素浄瑠璃興行の事

病気に取り合う事

金毘羅権現奇瑞の事

梶太夫予州銅山見物の事

銅山にてお座敷の事

第二十八の巻	(嘉永 3)	P 3 4 0
--------	--------	---------

銅山図

第二十九の巻	(嘉永 3)	P 3 4 1 ~ P 3 5 0
--------	--------	-------------------

予州銅山名滝に梶太夫が弟子俣、水あそびの事

銅山敷場役所にて座敷の事

予州新居浜連中別れの盃の事

真鏡記 全 (慶応元)	P 3 5 1 ~ P 3 5 5
略注	P 3 5 7 ~ P 3 7 2
あとがき	P 3 7 3 ~ P 3 7 4
索引	P 3 7 5 ~ P 3 8 3
校註者略歴	P 3 8 4
奥書	P 3 8 5

3. 解説

染太夫一代記の成立

六世竹本染太夫の筆による自伝である。日記をもとにして、後年に読み物として再編成して書き上げられた29巻の一代記である。別冊の真鏡記も収録している。「素麺の滝に弟子と遊ぶ」文章は浄瑠璃本になっており、浄瑠璃調になっているのがおもしろい。

愛好家の間では明治時代から知られていたが、長らく全文にふれることはできなかった。昭和4年6月以降、故石割松太郎が個人雑誌「演芸月刊」に「染太夫日記」を連載していった。しかし、廃刊となり第21巻の途中で読めなくなった。それからは、幻の書として歳月を重ねた。昭和48年1月5日、井野辺潔によって「染太夫日記」を「染太夫一代記」として刊行される。

4. 内容のあらまし

第二十六の巻 (嘉永2) P 3 1 5 ~ P 3 2 5

予州郡中鐘掛天満宮出火の事

大阪長堀住友の別家いづみや増田半蔵という者は、梶太夫の母の甥である。母もこの世を去り、梶太夫の時代となった。14歳の鶴太郎という倅がいる。故人の増田半蔵にも長三郎という子があった。親の名を継ぎ、住友に勤めていたが、^{ほうらち}放埒に身を持ちくずしたので、住友の方式で予州銅山の役所へ元方役に追いやられて、前年より家内を連れて銅山立川中の宿の役所に勤めている。家内は1里ばかり浜手の新居浜に住まわせている。

半蔵は、梶太夫が予州郡中に入るのを聞いて、わざわざ使いの者をよこした。「今は銅山へ入山するのは難しいが、住友の親類なれば心やすく、ぜひとも銅山へ入山するように」との知らせであった。梶太夫は銅山見物をしたいと思っていると返答して使いの者を返した。

※1里ばかり浜手の新居浜は、2里浜手である。

梶太夫伊予銅山行き極まる事

松山城下の芝居も済み、三津ヶ浜に行ったが追い立てられ郡中に行き、金毘羅を

参詣して帰宅するので荷物をまとめた。家内6人連れで郡中を出発した。

予州西条新居浜角屋へ着く事

三津ヶ浜、堀江、北条、今治と廻り、西条大町たのやに泊まる。新居浜は西条から3里先である。

新居浜の西原角屋九右衛を尋ねて聞くと、親類の増田半蔵は、角屋から1里の立川の役所に勤めている。女房衆は角屋九右衛門の裏に住んでいる。梶太夫たちは角屋の座敷に泊まる。

※角屋から立川中宿まで1里だと、角屋の位置は松原に当たる。角屋の裏に掘り抜きの清水が湧いているので扇状地中央の松原ではない。湧水地帯なので沖積平野の新居浜浦となる。挿絵に「豫洲西條領新居浜浦西原加登屋九衛門家」とある。1里の路程は2里である。

なお、挿絵の銅山の横に石地藏が記載されているのは銅山越えの地藏である。延享元年(1744)の地藏はすでに安置されている。

親類増田半蔵に世話になる事

角屋への挨拶を終え増田の家の土蔵に落ち着く。

梶太夫は増田の親類であることを新居浜の人はよく知っているので、浄瑠璃の興行をたびたび頼まれていた。年も押し迫って松山から来たので、興行は来春早々からとしてそれまでは稽古を頼まれる。

角屋の土蔵に梶太夫の住所こしら拵ふ事

梶太夫は、金毘羅を参詣して年内に大阪に帰るつもりで郡中から荷物を大阪に送っていたが、家族や弟子とも相談して、新居浜で越年することとした。折悪く空き家が無く、角屋の土蔵を仮住まいとする。自分たちで工夫して普請することにした。仮住まいなので釘を使わず、縄で細工する。どぶ井は濁っていたが、掘り抜きがあり清水が湧いていた。

第二十七の巻(嘉永2~嘉永3) P 326~P 339

予州新居浜加登屋九右衛門土蔵うちにて

角屋の土蔵への引っ越しを済ますと、増田半蔵は立川中宿から黒米2俵と諸道具を送ってきた。

※黒米は古代米で、耕作条件の悪い山間部で作られていた。飢饉のときの食料にったりしていた。別子銅山へは標準米だけでなく黒米も集められていた。

梶太夫連中のけいこ始める事

近郷近隣の旦那衆から浄瑠璃の稽古を頼まれて始める。昼夜の稽古も怠らなかったので、にぎわった。立冬も末となり、すす払い、餅つきをした。大阪流の餅つきはめずらしく、愛嬌となった。

梶太夫の弟子中打ち寄って今宵節分によって

弟子たちは、長逗留の土蔵暮らして気晴らしもない。今日は年に一度の節分なのでひと騒ぎを企てる。

大坂流虎子殿^{とん}の見舞いしゃれの事

節分には、どこの国も決まりきった行事をするので「大坂流虎子殿の見舞い」を洒落として思い付き、派手な身支度をする。梶太夫夫妻も加わって賑やかに騒ぐ。加登屋の主人が、何かとのぞきに来る。「節分の日は、大阪では住家の地中の大石^{おごころ}持ちを治める年に一度の日で、奇妙なまじないをする。」と答える。加登屋の家内連中も加わり、若者は図に乗り騒ぐ。酒がまわって表に出て行って、家々をおこして回って騒ぐ。銅山かかりの衆は、大阪で毎年見ているので懐かしく、目出たいと酒肴を振舞う。加登屋に帰って酔いつぶれるまで飲む。こうして賑やかな一夜が過ぎる。

梶太夫新居浜土蔵にて越年の事

長逗留の費用は増田半蔵から送られ、何不自由なく正月を迎えた。

弟子の稲太夫を大阪へ遣わした。住友の銅船の歓喜丸に乗せてもらって新居浜に帰ってきた。

別子銅山の銅を大阪に送るには、銅山から立川中宿に下して、新居浜の口屋に運び、銅船で大阪に送る。当磯辺には銅船が5艘ある。1ヶ月に2艘、銅を積んで大阪に行く。

この界限に新四国がある。御代島はあさり貝がおいしい。この島には不思議なことがあり、干潮時には8丁ばかり歩陸^{かち}をあゆみ、満潮時は道がつぶれて大海となって千石船が通う。

また、7～8丁先に大松原があつて松露拾いに出かけたが、取れないでいると松原の支配人の新田の七左衛門が来て、20～30個見つけてくれた。

逗留も如月になった。土蔵内に土を盛り、掘り抜きの水を引いて泉水の景色を作った。加登屋の主人が芋を生けた土だったので、叱られた。

西条新居浜慈明寺において梶太夫素浄瑠璃興行の事

慈明寺の普請が成就したので、稽古連中が請け元となってこけら落としの浄瑠

璃興行が叶った。水引幕、提灯は一の宮大神宮の祭礼のものを使った。これまでの興行より華やかであった。

慈明寺 創立は不明であるが、現在の銅夢にいほま敷地にあった新居浜浦と金子村の祈禱寺であった。明治3年に廃寺となった。

病気に取り合う事

興行が差し迫った時に梶太夫が病気になった。明星医師に見てもらったが、よくなるしない。

金毘羅権現奇瑞の事

14～15丁先の久保田の金毘羅権現は奇瑞有と聞いて、7日間、夜の暗がりにも日参する。格別の験も見えないで周囲の者は心配した。興行の初日が来て、ふらふらの体で高座に上がり死に物狂いで語ると、語りおおせることができた。この時に声が出なかったら不評判になったところであったが、大入りとなった。金毘羅権現に病気平癒のお礼を奉納する。

如月半ばになり、10里山奥の銅山の雪も大半消えて、見物の時節になったと増田半蔵に勧められた。早々、支度にかかる。

10里山奥の銅山 40kmは遠すぎる。20kmなので5里である。

梶太夫予州銅山見物の事

増田半蔵は立川中宿の元締めとして勤めている。内室は新居浜に住んでいる。昔は手代衆で女房持ちの人は銅山と一緒に住んだ。近年は女の方は一緒に銅山に住まなくなって、新居浜に住まわすようになった。

半蔵は伊兵衛を迎えに遣わす。梶太夫は家内の内6人を連れて行く。新居浜浦から立川までは平道で1里半余り。川の水は銅山から流れているので薄赤き銅水。登っていくと茶染汁の如く。半蔵は元締めだが、皆の手前、親戚でも中宿に留め置けないので、立川の伊兵衛宅に泊まる。

半蔵から銅山の役所々々へ見物の依頼状が届けられた。嘉永2年の改革で、芸人の入山は禁止されていた。今回は半蔵の引法で認められた。伊兵衛の案内、勝蔵の腰押しで登山が始まった。

当山は、昔は鳥も通わぬ深山であったが、銅山開発で岩石材木で道を作り、大岩石は両方へ切割った道だが難所である。山登りに弱い人には腰押しが付いた。

立川を出発しておいおい登ると、^{よそ}外国山に見慣れぬ山川惣木谷間恐ろしく見事である。一步間違えば谷に落ちる。下は数尋の早瀬谷、水は銅色である。

右に見る滝水は銅山より落ちる赤き水、左の滝水は外国より落ちる清水である。
これを梶太夫は源平の滝と名付けた。両滝の間に板橋があり、その向うは七々曲り。

その先のせり割石、馬の背は道幅が狭く、中高く蒲鉾道。三十六曲がりには下かたてら見るとなかなか登れそうにないが、ジグザグに登るので知らない間に登っている。130丁の休憩所のない道である。登り切れば平道で関所がある。

関所は茶所の様でもあり、半蔵から手紙が届いていた。立川から登る稼ぎ人の昼食場所でもある。登りには銅山行の米薪、味噌、醤油の類を荷ない行き、下りは銅を背おいて下る。

関所から18丁、深山は雪が積もっている。日陰には2～3尺積もっている。雪で道筋が分からないので道の印として木の柱が立てられている。それで怪我なく歩む。

間もなく峠で、石の地藏さんが安置されている。どちらを見ても谷が深い。向うへ下る方は銅吹場、稼ぎ場所ですぐれの山の色も赤色である。青色の草木は一切見えない。家も世に見慣れない建て方である。いずれも板ばかりの小屋で、藤かずらで取り固めている。土壁などはない。道は悪路で、高低の石道である。道なき山へ棚を掛け岩石で道としている。この山には、家数より人数が多い。稼ぎ人の顔かたちも見苦しい。

役所へ着いて、医師の上野正元宅へ半蔵の手紙を持参して落ち着く。役所より届いた夕食のお膳は、男所帯と見えて膳家具、料理は無骨で誠に大まかであった。上野正元の家は、数畳の間、6畳の間、3畳の間、1畳の庭で、賄い方のおやじと先生の二人暮らしである。梶太夫ら6人が4夜の泊と押し込む。ほの暗き家で、障子には埃が積もり、銅焼場のにおい、硫黄の匂いにむせぶ。

銅山にてお座敷の事

医師の上野正元は梶太夫一行を芸人と知り、敷役所の座敷での一会模様となる。

正元の勧めで、伊兵衛の案内で山中見物に出かける。見物なので道の良し悪しは問題にしない。険しい岩道に出て行った。見る石は白石で、銀色に光り外山には決してない珍しいものである。氏神の金山大明神が小山の山頂にある。境内は1丁四方、役所々々支配人、元締、手代衆より献上の石燈籠、金燈籠が数多くあり、尊く祀られている。

神社から北西へ下った所に並んでいる小屋は白石焼場で、いずれも門口にどこの焼き場と印がる。また、白石割場があり、稼ぎ人の女房、娘、子供の仕事である。役所の元締、支配人、手代、丁稚は大阪より来ているので、女房を連れてくることは禁じられている。だから半蔵の妻は新居浜に住んでいる。勘定場役場は当山の表役で支配人の居所である。勘定場を勘場と言っている。

風呂は家方箱造り、4～5人が湯に入れる。風呂焚き男が薪を7～8束をいっぺんに入れている。十能はタライの様である。何事につけても普通より大きい。

役所に入ると、裏に大工小屋から作業小屋、髪結い床がある。また、この勘場を売場ともいう。酒、味噌、醤油の類を稼ぎ人に売る。帳面通い付けである。ただ物質を取る役もある。医者^{イサ}は当山稼ぎ人335人から薬代として1ヶ月に1人前銀一分づつ、無病でも掛けおく。これが病気の時の薬代となる。医師の給銀はお抱え医師なので1ヶ年いくらと決めている。

勘定場役人 吉村市右衛門
八尾柳右衛門
巨沢為助
留田半助
北脇新右衛門 以上

銅吹方役所は床屋という。黒塀作りの門構えで、高札、御用提灯がある。役所の裏に銅吹所があるが、汚いので部外者はなかなか見物ができない。玄関から裏に出てあちこち見ると吹き場が何件もあった。火は火事場の様で、作業員はさすまたで火をつついている。白石を炭火で溶かして抽出すれば、石が溶けて流れた後に銅が残る。

役人 岡野徳兵衛
土岐儀兵衛

敷場役所は敷方役場ともいうし、単に敷場ともいう。この役所は格別大きくて上がり口は高い。能舞台のかかりのようなものである。手代衆は帳面を控えている。手代は、坑道から運び出して堀子の名札をつけて広庭に積み置いた鉍石を計量して買い付ける。

坑口はいくつもあるが、挿絵に描いた坑口は、役所の右手にある別子銅山第一の坑口である。鉍石を持ってくる下財の姿は、白木綿のおくびの無い襦袢一枚である。山蔓で編んだ^{ふご}畚に鉍石を入れて汗を流しながら背負い、左手にはサザエの貝の燈火を照らし、右手には石割りの道具を持っている。顔も体も真黒である。異国の黒子という風体である。また、下財には上手下手がある。5丁か10丁入って一人で鉍石を持って帰る者もあり、1里2里も行く者もある。坑道は蜘蛛の巣のように八方に分岐している。坑道の中は、夏は冷たく、冬は暖かい。坑道内の湧水は天井から雨のように落ちて下財の体を濡らすので燈火も当然消える。燈火が消えないようにサザエの貝の持ち方があるが、それは口伝である。鉍石には、いろいろな名称がある。人の顔が写るのは鏡石、金砂子を振った様なのが吹寄石、いずれも土産にするとよいものである。鉍山のあらましは以上。

役人 尾崎市郎兵衛
渡辺嘉子兵衛

新居浜から立川まで1里半

前には1里と記述しているが、ここでは1里半となっているが、実際は2里。

右は銅山よりの赤水、左は
て外国よりの清水

遠登志で足谷川と小女郎川を右・左に上から見
いる。橋は下の橋である。外国は天領の角野に
対しての西条藩となる。

なお、現在で示すと、上の橋は第三、中の橋は
ペルトン前である。

道の印として木の柱

下條桂谷の「別子銅山図の南図」の銅山越えに
柱が描かれていて、峰地蔵の祭礼時の幟掉か推
察したりしていたが、「目論見書」が完全翻訳さ
れて、雪道の道標であることが判明した。しか
し、梶太夫が書き記していたことになる。

勘定場下の大階段の北側にある。

医師の家

はくせき
白石

鉛で鉱石のこと。

敷役所

舗役所に同じ。

小山の金山大明神

別子の縁起の端に鎮座する大山積神社である。
金山大明神は嘔吐物から生まれた神。嘔吐物の
外観が鉱石を溶かした様に似ているところの連
想から鉱山の神とされている。鉱山資源の加工
技術やその製品の守護神としても信仰を集める。
中国山地に発達した鉄製錬のタタラ系の鉱山の
神と考える。

銅吹方役所は床屋

勘定場の南側の喧嘩谷・了簡谷の下と対岸の所
にある下の床屋である。吹所、炭蔵、銅蔵が連
なっている。

鏡石

断層面でつるつるになった鉱石。

おくび

おくびのこと。衣服の前襟のこと。

兵衛(支配人在籍期間は、文政5年～天保元年)が中谷太兵衛のあとを受けて別子銅山支配人になった年に当たる。支配人就任を記念して東臙に描かせた「別子銅山図」で、2代・今澤卯兵衛支配人(在籍期間は、嘉永2年～安政4年)が、勘定場の新座敷の床の間に掛けてあったものを梶太夫が模写したものである。「別子銅山図」は、別子銅山記念館に収蔵されている。

第二十九の巻(嘉永3)

P 3 4 1～P 3 5 0

予州銅山名滝に梶太夫が弟子倅、水あそびの事

見物するものも多くて、今日は素麺の滝を見に行く。落差は3丈ばかり、水は左右に分かれ千筋に落ちるので素麺の滝という。滝の元に大山積大明神がある。

弟子4人が寒い中、唇を青くしながら滝の中に遊ぶ。旅宿の正元宅に帰って、武勇伝を話す。

滝元の大山積大明神 縁起の端の山神宮大山積神社とは別の大山積神社。天保10年の(1839)別子山内図に描かれている。

銅山敷場役所にて座敷の事

銅山敷役所は能舞台の様だと言ったが、昔は9月の祭礼には能狂言が演じられたと聞く、ここを浄瑠璃舞台とする。間口5間、正面は牡丹に唐獅子の張り襖、上には板彫りの霞桜の釣り枝、前には針金釣の引幕。桜は手代の即席細工で、幕は昔から役所にあったものである。広い前庭が客席で、前庭の両側に棧敷を作った。見物料金は無料なので400人は見に来るだろうと思う。

浄瑠璃次第

廿四孝	三口	稲太夫	楠六
講釈	八	梶代太夫	鶴太郎
日蓮記	三	梶さ太夫	鶴太郎
忠臣蔵	九	梶太夫	楠六

夜の八ツ時に終わる。素早く後片づけをして夜半には正元宅に帰る。役所の役人衆が大いに悦び、酒飯をよこしたので一行は御馳走になる。一夜を明けると今度は鰻を焼いてよこした。後で聞くと、鰻は別子銅山の自慢である。

ようやく下山となる。正元へ暇乞し、敷役所にお礼に行くと手代衆も名残を惜しみ、土産に白石類をいろいろくれる。下財たちも大いにヒイキと見えて、いい白石をくれる。かつぎの伊兵衛の案内で道草をしながら立川中宿に戻る。登りの時と同様に伊兵衛宅に泊まる。翌日は、増田半蔵がふだんの憂さ晴らしとして自用にて、

梶太夫一行を妻の居る新居浜に同行して送る。梶太夫7人は加登屋の土蔵に泊まる。
是より銅山記

当役所に昔よりある書物。尤も御公儀様へ調べ有之。

予洲新居郡足谷別子銅山記

- 一、別子銅山開発元禄四年未年より当年迄百五十二年。初御代官後藤覚右衛門様、享保六丑年より御領に成、百二十年。
- 一、立川御銅山開発慶安元年より当年迄百九十五年、寛永元年申より御領所に成る、百三十七年、是前山師九代。
- 一、手禄に相成七十三ケ年。
- 一、銅運上は銅共銅千貫目に付、百十五貫四十四匁二分四厘八毛。
- 一、両銅山間符十ケ所。
- 一、三ケ所当時水抜新普請。
- 一、二ケ所水抜七ケ所風廻又は不用。
- 一、鉛石一日上り高五千貫目迄。
- 一、鉛石十貫目に付、代銀二匁一分余に当る。
- 一、鉛石百貫目に付、銅四五貫より六七貫目迄、鉛石善悪に寄不同。
- 一、鉛石千貫目に付、焼木三百貫目より五百貫目迄、日数三十日程。
- 一、焼窯二百七十枚、但し小窯之積り。
- 一、樋数、別子二百九挺、長さ一丈より一丈二尺。立川百八十挺、内法四寸四分。
- 一、家数三百三十五軒。
- 一、惣人数三千二百人程。
 - 一、掘子四百十八人。
 - 一、立川中持三百十七人。
 - 一、木方者三百人程。
 - 一、水引四百八十六人。
 - 一、碎女三百人程。
 - 一、炭山掛九百五十人程。
 - 一、得歩引百三十四人。
 - 一、床屋者二百人程。
 - 一、山師家内百三十二人。
- 一、一ケ年分入用飯米、凡一万二千石内外。内八千三百石買請御米。
 - 一、六千石程松山御領所。
 - 一、二千三百石程作州脇坂様御領所並御代官所。
- 一、小足谷水抜寛政四子年より切物当年迄四十九年。
- 一、寛政六寅年より四十五ケ年以來、土州買請炭仕成。此道法五里又は七里之場所之有。

- 一、吹方人数。
 - 一、鉦吹大工一人、手伝五人。
 - 一、真吹大工一人、手伝三人。
 - 一、鉦吹一仕廻焼鉦四百八十貫目吹立、此鉦四十貫目より五十貫目迄。
 - 一、真吹一仕廻鉦百貫目吹立、此銅二十五六貫目より四十貫目迄。
 - 一、炭入用銅千貫目に付、炭三千八百貫目余。
 - 一、銅出来高一日凡二百七十貫目より三百四十貫目迄。一ヶ月凡九千二百三十貫目より一万貫目迄。
 - 一、御林道法東西五里半、南北三里程。所に寄二里半又は二里。
 - 一、銅山より道。
 - 一、立川迄二里半、弟地迄一里半。
 - 一、新居浜迄四里余、落合迄四里半。
- 銅山略々写し。

予州新居浜連中別れの盃の事

梶太夫は銅山見物が済み、再び加登屋の土蔵に泊まるが、出発の用意や荷ごしらえもできたので、在所の人たちと海辺の砂原に毛氈を敷いて、大散財の別れの盃を交わした。酔いくたびれて夕暮れ過ぎに、それぞれ自宅へ帰る。

暇乞いのあいさつを仕残した人もいなくなったので、いよいよ出発となる。金毘羅への参詣の支度で出てくると、増田半蔵、加登屋の家内中、近所の知り合いに見送られて出発となった。その日の道のりは8里とし、川之江の伊吹屋に泊まった。翌日は金毘羅の桜屋に泊まり、其の翌日に金毘羅に参詣した。

5. あとがき

昭和43年、大阪で開かれる東洋音楽会大会のテーマが義太夫節だったので、「染太夫一代記」の所在を探して、原本の所蔵者の黒井乙也に出会った。しかし、出品してもらえなかった。門外不出は厳密に守られた。そして、非常な愛着を持っていた黒井の翻刻承諾を得て出版できた。

6. おわりに

嘉永2年の別子銅山の様子の一部が分かる。例を挙げると、①雪道に目印の木の柱が立ててある。銅山絵図で銅山越えに柱らしきものが認められていたが、地蔵祭りの幟掉だろうと言われていたりしていたもの。②登りに弱い人用に腰押しの人があった。③黒米も飯米としていた。④医館の間取りが、数畳の間、6畳の間、3畳の間、1畳の庭。⑤泉屋の支配人、元締、手代衆は単身赴任が原則。⑥男所帯だから食事は男賄でおおざっぱ。⑦山道の描写は現在の道と変わらない。

染太夫の描いた挿絵も上手で力量を垣間見させる。下兜、上兜、雲が原、西赤石、銅山越え、銅山峰、西山、父山、黒森、石鎚のスカイラインの描写も正確である。

また、挿絵の緻密に模写した「銅山図」は、別子銅山支配人の2代・今沢卯兵衛が東臈に描かせた「別子銅山図」で、別子銅山記念館に収蔵されている。館内に展示されているのは、そのレプリカである。本の挿絵は印刷されて詳細が分からりにくいですが、別子銅山記念館に行くと元絵の詳細がよく分かる。

好奇心旺盛と見えて、別子銅山備えの「予洲新居郡足谷別子銅山記」を増田半蔵の仲介だろうが、書き写している。江戸期の別子銅山の計量的様子が垣間見られる。

「百聞は一見に如かず」と言われるが、その時に見た人の目を通して見るのも一つの方法である。郷土関係図書として「染太夫一代記」が新居浜の図書館に館蔵されていなかったのは惜しまれる。